

第52回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

経済産業大臣賞：

『村上善男—玄々とした精神の深みに』

装幀者：西野 嘉章氏（東京大学総合研究博物館「インターメディアテク」）

●作品作りで大切にしていることは何ですか？

自分が作りたいと思ったもの、それをデザインに反映させるのが一番重要なことだと思います。私の場合、作りたいものというのは、本棚に並べておいて、長く見ていて、見飽きない本です。時代を感じさせない、不易なデザインを実現すること。手にとったときに、掌中にしっくりくる本を作りたいいつも思っています。

私は著者であり、装幀者でもあります。ですから、自分の書いた文章に思い入れがある。それが紙面にも、外装にも反映されているのだと思います。

書き手であり、デザイナーであることから、読み易い本、手に取り易い本を作りたいと考えるようになったのかもしれない。

最近とくに、印刷した紙を無駄にしないといけないと思うようになりました。ヤレ紙をただ無神経に廃棄するような時代は終わつたと思います。そうしたモノの再利用を考え始めると、なにか新しいものが作れるような気がします。



写真：西野嘉章氏

●今回の『村上善男』という作品にも西野さんのこだわりが活きているのでしょうか。

天地小口の墨塗りは以前からやりたと思っていたことです。

経済産業大臣賞

『村上善男—玄々とした精神の深みに』

出版社／玄風舎
東京大学総合研究博物館
「インターメディアテク」
装幀者／西野嘉章+山本浩貴
印刷会社／秋田活版印刷株式会社
製本会社／南篠原紙工



こうすると本文の余白部分が目立って、白い紙の美しさが際立つ。非対称をベースとするデザインにまとまりが生まれるのです。それもあって、本全体で余白を多くとっているのです。

明朝体で組まれたページのなかで、目についた言葉を、大きな太ゴシック体に変えて目立たせているのですが、これは「読む本」より「見る本」の方が好まれる時代だからです。また、大きな文字で本を作ること自体、今日の出版界が失ってしまった、「贅沢」だと思っているからです。

●紙の本の未来についてお聞かせください。

紙の本の良いところは、一冊一冊にムラがあるところなのです。これも今は昔の話なのですが。天地小口の墨黒インクが版面に滲み出ているところもそうなのですが、ひとつとして同じ本が無いというのが、これまでの書物の歴史だったわけです。手作りすれば当然そうなりますから。ですが、最近の本は、印刷技術も、用紙やインクが進化し過ぎてしまい、均質化したものしか作れなくなりました。キレイな本も良いのですが、それでは電子書籍と同じで、マス生産物でしかない。ならば、ということで、手作り感を出してみたらどうか。印刷ムラを活かしたりすることは、アートの世界では普通のことだったわけですからね。そうしたアイデアを取り込んでゆかないと、紙文化の将来は無いような気がします。

読者の側にも責任があります。美しく読み易い本、本棚に並べて嬉しくなるような本を作ってくれと出版社に求めるべきなのです。「読めれば良い」という本は、電子ブックで充分なのです。デザイナーはデザイナーで、志を高くもつこと。そのためには過去の書籍遺産を勉強することが必要なことのように思います。

(了)